

# 日台関係史からみる台湾における日本文化受容の揺らぎ

## Research on How Colonial Taiwan Influenced by Japanese Culture from the Perspective of Japan-Taiwan Relations History

◎作成 王詩芬<sup>1</sup>  
Shih-Fen WANG

<sup>1</sup> 東京大学大学院 学際情報学府学際情報学専攻  
Graduate School of Interdisciplinary Information Studies, The University of Tokyo

**要旨**・・・1930年代の植民地台湾を理解するために、台湾人留学生在東京で発刊された日本語文芸雑誌『フォルモサ』（1933.08～1934.06）に焦点を当てて分析する。研究手法として、ほぼ同時期に台湾で刊行された婦人家庭向けの日本語雑誌『台湾婦人界』（1934.05～1939.06）と違う角度から植民地時代において台湾人の「国家」、「民族」観を明らかにする。

**キーワード** 日本統治時代、アイデンティティ、雑誌研究、台湾植民地、日台受容関係

### 1. はじめに

現在の日本における日台関係研究では、日本の植民地支配と、それが現在の台湾社会に与えた影響を冷静に評価しようという機運が高まっている。たとえば、そうした研究のひとつである『台湾／日本——連鎖するコロニアリズム』では、多角的に日本の植民地支配を評価し、それにもとづいて、日本の植民地支配を過度に賛美する金美齡の「台湾で生きている『日本精神』」という論文を批判している。しかし、このような研究にあっても、植民地支配時に日本語教育を受けた世代が、現代の台湾文化の形成にどのように寄与したのかという点に関しては論じられていない。さらに、台湾における日台関係の研究に関しては、国民党が戦時中日本とは敵対関係にあったため、政治的観点から研究が奨励されてこなかったという事情もあり、やはり日本語教育を受けた世代に関する研究が不足している。

しかし、日本語教育を受けた世代が現代の台湾文化に与えた影響を等閑視することはできない。第二次世界大戦の前後、台湾人は自らのアイデンティティの揺らぎを体験した。すなわち、半世紀に渡る日本の植民地支配を経て、いざ「台湾が植民地支配から脱した」と思いきや、蒋介石による国民党政権の高圧統治のため、台湾人は「国家」や「民族」に対して非常に複雑な感情を抱きはじめ、自らの帰属意識が不安定な状態に陥ったのである。そのような時代を生き抜き、現在の台湾社会の基礎をつくった世代には、日本的な思考と日本語教育の影響が見受けられる。それゆえ、本論文では、先行研究では論じられることの少なかった、日本の植民地支配・日本語教育が、当時の台湾文化、とくに文芸のジャンルにおいてどのような影響を与えてきたのかという点を手掛かりに、1930年代の台湾人が持つ「国家」、「民族」観を解明したい。

### 2. 研究方法

本研究の出発点として、修士論文で主題にした『台湾婦人界』と重なる時期に台湾の知識人達が刊行した文芸雑誌について研究する。1930年代の植民地台湾では、『フォルモサ』（1933.08～1934.06）、『台湾文芸』（1934.11～1936.08）、『台湾新文学』（1935.12～1937.06）と『風月報』（1937～1944）などの日本語文芸雑誌が續々と創刊された。これらの雑誌は、渡日経験をもつ楊逵、張文環及び黃得時が編集に携わっている。そのため、渡日後に、「国家」と「民族」に対する台湾人としての見方はどのように変化したのか、そして日本に対する見方はどのように変化したかを解明することができると思われる。

現段階取り組んでいる研究内容は、台湾人が東京で発刊された日本語文芸雑誌『フォルモサ』（1933.08～1934.06）に焦点を当てて分析する。研究手法として、修士論文で取り扱った『台湾婦人界』（1934.05～1939.06）の間に台湾で刊行された婦人家庭向けの日本語雑誌と違う角度から植民地時期において台湾人の「国家」、「民族」観を明らかにしたい。それと同時に、両誌を比較しながら、浮き彫りになった1930年代台湾植民地時代の雑誌出版事情の現実性と相対性を究明する。

### 3. 家庭総合雑誌『台湾婦人界』の創刊目的

『台湾婦人界』の創刊の目的を明らかにする前に、初めに柿沼文明の人物像を考察して行こう。柿沼の生涯にはよくわからないところが多い。柿沼文明という名前は彼の本名だが、『台湾婦人界』の誌上で使われているペンネームは「二三秋生<sup>1</sup>」、「柿沼二三秋<sup>2</sup>」などが確認できる。彼の生没年に関してははっきりと分かるのは、彼が1936年1月1日に自らの命を絶ってしまったことである<sup>3</sup>。生年に関しては明らかな情報はないが、自分の年回りは巳年だと言及している箇所から推測すると<sup>4</sup>、柿沼は1893年か1905年かのどちらかに生誕したと思われる。筆者は柿沼文明が『台湾婦人界』創刊以前に新聞界で働いていたこと、彼が持つ雑誌の編集能力、創刊の意図などから考えてみれば、彼の生年は1893年であり、享年43歳だったと推測している。また、「故柿沼文明告別式<sup>5</sup>」で把握できる情報によると、彼の妻は柿沼栄子であり、出身は恐らく群馬県である。柿沼文明の死後、『台湾新聞総覧』によって彼が雑誌の放漫経営のために責任を感じ、自殺することに至ったと評価された。

柿沼が『台湾婦人界』を創刊する一大目的は、本島台湾で生活している人々の生活に最適な雑誌をつくるということである。本島台湾に居る読者は、ただ内地日本からの婦人雑誌で入手した情報をそのまま生活に援用しても、実際には何の役にも立たないことが多い。柿沼の言うように、内地日本と本島台湾との間には、文化的、風土的なギャップが大きいからである。台湾は内地日本の延長であるというものの、内地日本のものを全般的に本島台湾に敷衍すればいいとは限らない現実がある。それでも内地の雑誌が多くの人に読まれていた理由は、多くの人が内地の文化に対してある種の憧れを抱いていたためである。そこで、柿沼は、台湾の正しい情報に関しては「内地の婦人雑誌ではどうしても手の届かない領域」であるとすれば、これこそ雑誌経営のチャンスだと考えたのだろう。ここに柿沼の読者のニーズに敏感に反応するセンスを見ることができる。さらに、周りの在日日本人に冷たく批判されているにも関わらず、果敢に個人資本で『台湾婦人界』を創刊することに挑戦する柿沼には、強い冒険心と高い理想性という性格が窺える。

### 4. 文芸雑誌『フォルモサ』の創刊目的

『フォルモサ』という雑誌は昭和8年7月に、当時の東京市本郷区にある台湾芸術研究会によって発行された。編集兼発行人は蘇維熊である。彼は東京帝国大学英文科を卒業し、戦後の台湾大学外国語学科で教鞭を執った。彼は台湾の固有文化と文芸を重視し、台湾の文芸運動に力を入れた。蘇氏によると創刊号の『フォルモサ』の主な執筆者は台湾人留学生である。

蘇維熊が『フォルモサ』の創刊の辞において、「台湾は固有の文化文芸があったか」という問いに対して、「三百年前に福建広東両省から台湾に移住した漢民族の一群は勿論中国南方文化の創造者の子孫である。台湾人には立派な文化遺産を有する<sup>6</sup>」と強調した。一方、『フォルモサ』の創刊号で楊行東が寄稿した「台湾文芸界への待望（寄稿）」において、「和文の文芸的表現！これはわれらの将来の最も大いに活躍すべき唯一の武器である、特殊事情のもとにある台湾、その文芸も又ここに始めて偉大なる著作、創作が生れ出るであらう。現在の処未だ模倣的なものに過ぎぬ観なきにしもあらず、然し既にかなりの成績と活躍を見てゐるのだ<sup>7</sup>。」ここで注目したいのは、二人の台湾人留学生が用いた「中国南方文化の創造者の子孫」と「和文の文芸的表現は唯一の武器」という表現である。台湾は歴史上に特殊な立場になっていた矢先に、留学生が自分の文化の源は中国にあるものの、日本語での創作によって、台湾の風土、文化、社会様相を描写されていた。すなわち、いわゆる「創作」の中に、中国、台湾、日本といった文化の三要素が混じっている状態である。それにもかかわらず、学生諸君にこういった創作活動に積極的に関与してほしいと呼びかけている。

### 5. おわりに

本論文では、台湾における日本語雑誌の展開過程を通じて、台湾人アイデンティティの形成過程の起源をたどり返すこと

<sup>1</sup> 二三秋生「編集室」、『台湾婦人界』、5月号、1935年5月、164頁。

<sup>2</sup> 柿沼二三秋「歳暮三品」、同誌、12月号、1934年11月、177頁。

<sup>3</sup> 『台湾婦人界』の沿革について、『台湾新聞総覧』では以下のように紹介されている。「ママ創刊頭初柿沼文明氏の個人経営なりしを昭和十年三月株式に改めたるに間もなく柿沼氏の放漫経営が禍を為し、同氏は遂に責を感じ十一年一月一日自殺するに至れり。」（豊田英雄編、国勢新聞社台湾支社、1936年、64頁。）

<sup>4</sup> 柿沼文明「僕の年頭の感」、前掲『台湾婦人界』、1月号、1935年12月、31頁。

<sup>5</sup> 「故柿沼文明告別式」、同誌、3月号、1936年3月、13頁。

<sup>6</sup> 蘇維熊「創刊の辞」、『フォルモサ』、第一号、1933年、1頁。

<sup>7</sup> 楊行東「台湾文芸界への待望（寄稿）」、『フォルモサ』、第一号、1933年、21頁。

を目標とする。そのために雑誌『フォルモサ』（1933.07～1934.06）を主に分析した結果、判明したのは以下のことである。第一に、本雑誌は台湾で五年間の発行期間に渡り、57号まで発行された『台湾婦人界』（1934.05～1939.06）と比較して、『フォルモサ』の出版地は東京にあり、発刊期間が僅か三期しかないにもかかわらず、台湾の文芸促進に大きな力を注いでいたといった差異が見られた。これは、本雑誌の特徴である創刊同人が主に台湾から日本に留学する学生であり、当時の留学生が主に法律か医学を専攻にしたが、『フォルモサ』の創刊同人は文学と芸術などを専攻にする留学生であったためである。第二に、こうした結果は台湾における日本語メディアの多様性を指し示すものであるが、一方で日本人が台湾で創刊された『台湾婦人界』と台湾留学生が日本で創刊された『フォルモサ』は、双方が「故郷＝台湾」への愛、そして台湾の文芸促進を目指すという点で共通していた。こうした知見は、既往研究では軽んじられてきた植民地支配期における日本語教育受容世代の、現代台湾社会に与えた影響を、歴史的事実から指し示すものである。もちろん本発表で扱った雑誌メディアはその一ピースに過ぎないが、こうした分析を今後行っていくことによって、植民地支配時に日本語教育を受けた世代はいかなる自己帰属をもっていたのか、台湾の文芸において日本の植民地支配がどのような影響をもたらしたのかを、今後解明することができると考えられる。

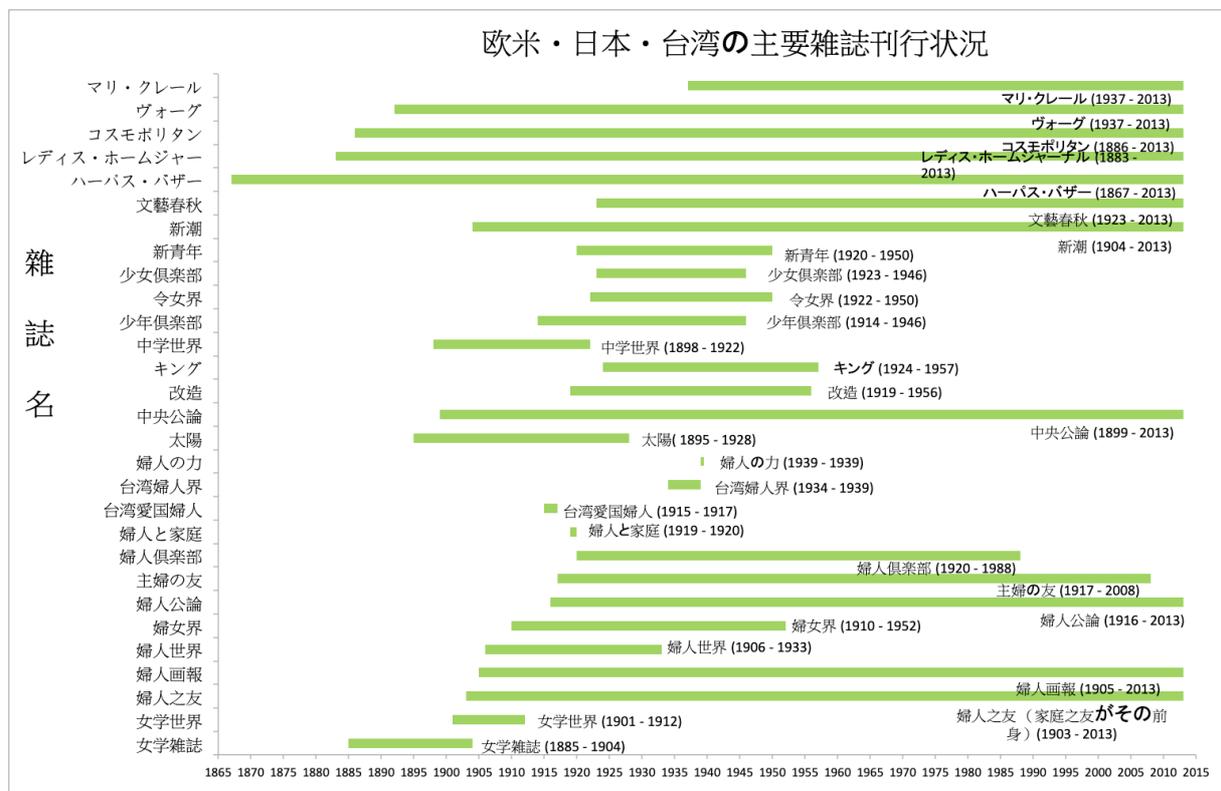


図1：欧米・日本・台湾の主要雑誌刊行状況（筆者作成）

参考文献

〈叢書〉（叢書別のシリーズ順にしたもの）

- 1) 酒井哲哉（編）『岩波講座「帝国」日本の学知第1巻 「帝国」編成の系譜』（岩波書店、2006年）
- 2) 杉山伸也（編）『岩波講座「帝国」日本の学知第2巻 「帝国」の経済学』（岩波書店、2006年）
- 3) 岸本美緒（編）『岩波講座「帝国」日本の学知第3巻 東洋学の礎』（岩波書店、2006年）
- 4) 山本武利（編）『岩波講座「帝国」日本の学知第4巻 メディアの中の「帝国」』（岩波書店、2006年）
- 5) 藤井省三（編）『岩波講座「帝国」日本の学知第5巻 東アジアの文学・言語空間』（岩波書店、2006年）
- 6) 末廣昭（編）『岩波講座「帝国」日本の学知第6巻 地域研究としてのアジア』（岩波書店、2006年）
- 7) 田中耕司（編）『岩波講座「帝国」日本の学知第7巻 実学としての科学技術』（岩波書店、2006年）
- 8) 山室信一（編）『岩波講座「帝国」日本の学知第8巻 空間形成と世界認識』（岩波書店、2006年）
- 9) 大江志乃夫（編）『岩波講座 近代日本と植民地1 植民地帝国日本』（岩波書店、1992年）

- 10)若林正丈（編）『岩波講座 近代日本と植民地2 帝国統治の構造』（岩波書店、1992年）
- 11)小林英夫（編）『岩波講座 近代日本と植民地3 植民地化と産業化』（岩波書店、1993年）
- 12)浅田喬二（編）『岩波講座 近代日本と植民地4 統合と支配の論理』（岩波書店、1993年）
- 13)高崎宗司（編）『岩波講座 近代日本と植民地5 膨張する帝国の人流』（岩波書店、1993年）
- 14)後藤乾一（編）『岩波講座 近代日本と植民地6 抵抗と屈従』（岩波書店、1993年）
- 15)川村湊（編）『岩波講座 近代日本と植民地7 文化のなかの植民地』（岩波書店、1993年）
- 16)三谷太郎（編）『岩波講座 近代日本と植民地8 アジアの冷戦と脱植民地』（岩波書店、1993年）

〈専書〉（日本語書籍のため、五十音順にしたもの）

- 1) 浅野豊美『帝国日本の植民地法制』（名古屋大学出版会、2008年）
- 2) 石田雄『記憶と忘却の政治学——同化政策・戦争責任・集合的記憶』（明石書店、2000年）
- 3) 小熊英二『単一民族神話の起源——〈日本人〉の自画像の系譜』（新曜社、1997年）
- 4) 小熊英二『〈日本人〉の境界 沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮 植民地支配から復帰運動まで』（新曜社、1998年）
- 5) 菅野敦志『台湾の国家と文化——「脱日本化」・「中国化」・「本土化」』（勁草書房、2011年）
- 6) 呉密察、黄英哲、垂水千恵（編）『記憶する台湾——帝国との相剋』（東京大学出版会、2005年）
- 7) 鍾清漢『日本植民地下における台湾教育史』（多賀出版、1993年）
- 8) 豊田英雄編、『台湾新聞総覧』（国勢新聞社台湾支社、1936年）
- 9) 林初梅『「郷土」としての台湾——郷土教育の展開にみるアイデンティティの変容』（東信堂、2009年）
- 10) マーク・ピーティー（著）、浅野豊美（訳）『植民地 20世紀日本 帝国50年の興亡』（慈学社出版、2012年）
- 11) 森宣雄『台湾／日本——連鎖するコロニアリズム』（インパクト出版会、2001年）
- 12) 若林正丈『台湾 変容し躊躇するアイデンティティ』（筑摩書房、2001年）
- 13) 若林正丈（編）、矢内原忠雄（著）『矢内原忠雄「帝国主義下の台湾」精読』（岩波書店、2001年）
- 14) 若林正丈『台湾抗日運動史研究（増補版）』（研文出版、2001年）

〈専書〉（中国語書籍のため、出版年にしたもの）

- 1) 柳書琴『荊棘之道：旅日青年的文學活動與文化抗爭』（聯經出版、2009年）
- 2) 蘇明陽、李文卿（編）『蘇維熊文集』（国立台湾大学出版中心、2010年）